

20 健診を契機に発見された急性前骨髄球性白血病の一症例

○水谷 陽介, 松岡 徳登,
池田 紀男, 宮木 康夫

日本赤十字社和歌山医療センター 検査部

【はじめに】

急性前骨髄球性白血病 (APL) は, 発病初期から線溶亢進型播種性血管内凝固症候群 (DIC) を高頻度に合併し, 脳出血などの致死臓器障害による早期死亡が問題となる疾患であり, 早期診断, 早期治療が極めて重要である. 今回, 末梢血検査所見において明らかな血球減少が白血球系のみ, DIC 診断基準も満たさないことから, 極めて発症早期段階であったと考えられる APL の一症例を経験したので報告する.

【症例】40 代男性

既往歴: 小児期に貧血を指摘

服薬歴: 4~5 年前から海外製の育毛剤内服
現病歴: 健診にて蛋白尿と血液検査の異常を指摘され, 当センター血液内科を受診. 血液検査の結果, 白血球の減少を認めた. 精査目的に骨髄穿刺を施行した結果, 前骨髄球を 65% 認め Faggot 細胞(+)であったため APL と診断され, 翌日緊急入院となった. 後日, 染色体異常 t(15;17)(q22;q12):PML-RAR α を有していることも明らかとなった.

【検査所見】

末梢血検査結果: WBC 900/ μ L (Seg 54%, Band 3%, Lymph 41%, Mono 2%), Hb 13.7g/dL, Plt 21.6 万/ μ L, PT-INR 1.16, APTT 32.5 秒, フィブリノゲン 155mg/dL, D ダイマー 3.35 μ g/mL, AT-III 123%, LDH 146U/L

骨髄検査結果: 有核細胞数 31.1 万/ μ L, 巨核球数 62.5/ μ L, 骨髄芽球 1.6%, 前骨髄球 65%, 骨髄球 2.8%, 後骨髄球 1.0%, 桿状核球 1.8%, 分葉核球 2.4%, 塩基性赤芽球 2.2%, 多染性赤芽球 10.2%, 正染性赤芽球 1.6%, リンパ球 10.8%, 成熟単球 0.4%, 形質細胞 0.2%, M/E=5.32, Faggot 細胞(+)

【考察】

典型的な APL 症例では, 汎血球減少や DIC を認めるが, 本症例では明らかな血球減少は一系統に限定されており, 他系統の抑制が明らかではないこと, および旧厚生省 DIC 診断基準を満たさないことより発症初期の病態を反映していると考えられた. ただし, D ダイマーが上昇していることやフィブリノゲンが基準値以下であることより, 血栓の存在が示唆されるため診断が遅れれば DIC を合併していた可能性が高い. APL は現在, APL 細胞を全トランス型レチノイン酸 (ATRA) により分化誘導し, 化学療法との併用により最も寛解導入率の高い白血病となっている. しかし, APL 細胞による DIC が重篤となり致死性の出血の合併のために早期死亡の可能性が高い疾患でもある. 注意深く形態観察を行い, 早期発見に繋げる事が重要であると考えられる.

連絡先 073-422-4171 (内線 1621)